作文教育についての一考察

―　本当に学校で文章の書き方を習ったのか　―

国語班
北田萌衣　板東理絵
堀内萌加　松田莉沙

１．はじめに

私たちは文章を書くことに対して苦手意識を持っていますが、書く技術を教わったという実感がありません。果たして私たちは文章を書く技術を教わったのでしょうか。どうすれば文章を書けるようになるのでしょうか。そこで私たちは、作文教育に関する意識調査を実施し、現状把握とともに結果分析し、作文教育について考察しました。

２．研究の過程

（１）　高津高校生、小学生、中学生、国語教員対象に作文教育に関するアンケートを実施する。

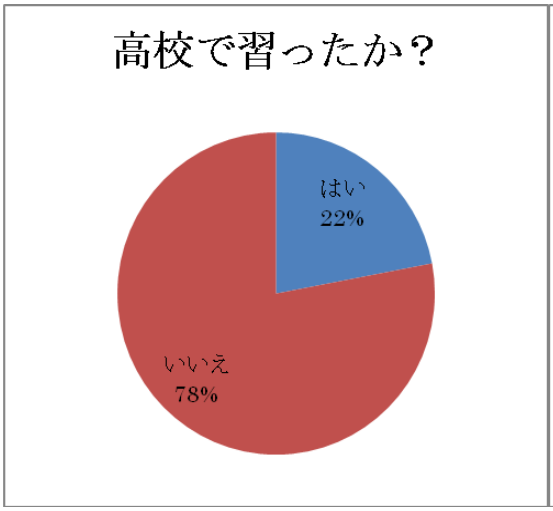
（２）　アンケート結果分析、特に教える側と教わる側の意識の違いに注目する。

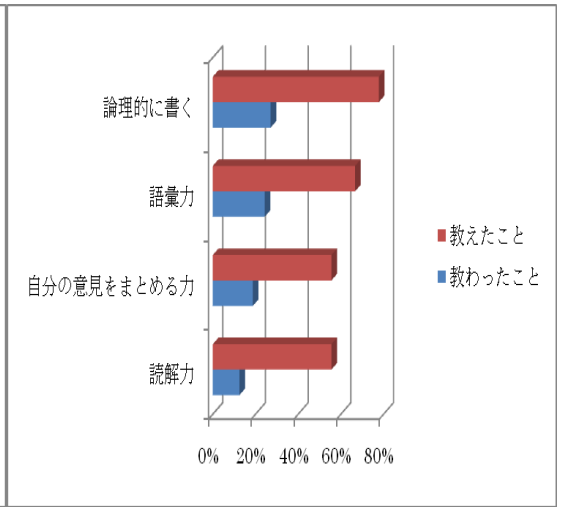
（３）　書く技術について、専門家（教育センター指導主事、新聞記者）に対してインタビューを行う。

（４）　アンケート結果とインタビュー内容から、作文教育の現状の問題点と改善点を考察する。

３．先生と生徒のアンケート結果

高等学校で書く技術を教わったと答えた数が少なかった。また、教員が教えたと思っていることと、生徒が教わったと思っていることが乖離していることがわかった。





４．新聞記者のアンケート結果

・インプットができなければアウトプットもできない。
・新入社員にはとにかくたくさん書かせるにつきる。そして、型を身につけさせる。
・手本になると見込んだ記事のスクラップを作る。
・文章をかみ砕いて丁寧に大事なことから書く。学生はもっと新聞を読むべきだ。
・伝えたいという強い思いが大切。

５．インタビュー結果

（１）大阪府教育センター主事　酒井保典先生

アンケート結果に失望。高校は抽象的な語が多く使われている文章を読む必要があるので、読解に力が入れられている。国語力は小中高で螺旋状に構築していくので連携した教育が必要。日常生活と学校教育を地続きにする必要もある。国語力すべての力を平等に身につけ、文章で自分の意見を述べる力も産業界から求められている。日本の教科書は英知の結晶である。書くことを手段としてではなく、目的とした授業が行われるべきだ。

（２）読売新聞社　浦田裕光氏

「読売スタイルブック」で決まった型を身につける。書くことのハードルを下げるために読む習慣をつけ、よい活字、古典作品を読むことでエッセンスをつかみ取り、個性も出していく。文章は時代、国を超えてその時の空気感などを鮮明に伝えられるのですばらしい。個性を出すには自分に身近なこと興味のあることを題材にすればよい。作者の感動は読み手にすべては伝わらないので、自分の関心があることを書くと感動が伝わりやすい。第三者の目も大切。

６．考察

教える側は、書く技術の指導を読解指導に含めるなど、「書く技術」そのものを教える授業の時間が確保できていない。そのため、教わる側は「書く技術」を教わったという実感をもてていない、また、先生によって教える内容に差があるため、継続的に教わったという実感も持てていない。書く力が重要視されていないことも理由の一つである。

７．まとめ

「書く技術」そのものを学ぶことを目的とした、計画的で一貫した教育が必要だと考える。さらに、教える先生によって変わることのない決まったスタイル・メソッドを作るべきである。

８．参考文献ならびに参考Ｗｅｂページ

読売新聞社スタイルブック委員会『読売スタイルブック』（読売新聞社）1954 年
近藤勝重『書くことが思いつかない人のための文章教室』（幻冬舎新書）2011 年
山岸弘子『一流の人が実践している日本語の磨き方』（角川フォレスタ）2014 年
高橋フミアキ『一瞬で心をつかむできる人の文章術』（コスモトゥーワン）2007 年
酒井隆『アンケート調査の進め方』（日経文庫）2012 年